

総合百科事典

(祭儀・祭礼から基本論文まで)

完成!!

# 住吉大社事典

真弓常忠編 (住吉大社宮司)

真弓常忠・田中卓・瀧川政次郎・本田安次・吉田豊・  
中村保雄・南谷美保・八木意知男・梶川信行・保坂都・  
野間光辰・多治比郁夫の各氏が執筆した住吉大社に關  
する論考十九編を、創祀・鎮座・神領・崇敬・神事・  
職役・神宝・文学・地誌ごとに類別して収録。

ISBN978-4-05100-4-03014



反橋を渡る神輿



粉糰の儀

◆B5判・上製函入・三六〇頁(カラー二〇頁)  
定価一五,〇〇〇円(一四,二八六円)

# 『住吉大社事典』 目次

『住吉大社事典』の発刊に寄せて…………… 真弓常忠  
凡例

## 祭 儀(住吉大社の年中行事)

## 創 祀

住吉大社本殿創建と古代神殿論…………… 真弓常忠  
住吉大社の創祀…………… 田中 卓

## 鎮 座

住吉造…………… 福山敏男

## 神 領

摂南地方と膽駒神南備山の神領…………… 田中 卓  
播磨国九万八千余町の神領…………… 田中 卓

## 崇 敬

住吉大社と防人…………… 瀧川政次郎  
住吉大社と遣唐使…………… 瀧川政次郎

## 神 事

御田植神事…………… 本田安次

## 職 役

中世の住吉社―氏族と職役―…………… 吉田 豊

## 神 宝

神宝の神世草薙鉞…………… 田中 卓  
住吉大社の舞楽・能面をめぐる…………… 中村保雄  
住吉大社と雅楽…………… 中村保雄  
―その演奏環境に関する歴史的考察―…………… 南谷美保

## 文 学

源氏物語の住吉信仰について…………… 八木意知男  
『住吉大社神代記』と歌枕―長柄の橋―…………… 八木意知男  
三山歌と住吉大社…………… 梶川信行  
津守家歌人の伝記―津守国基―…………… 保坂 都  
二萬翁西鶴と住吉神社…………… 野間光辰

## 地 誌

住吉の地誌…………… 多治比郁夫



察しても、これは日本横生つものではなく、大陸から入ってきたものと思われる。これが多分は以前からの習俗なものであって代るが、或は始めからとり入れられるかして、田植の神事に利用され、一方、独立にも祭礼等に流れてきたのではなかつたらうか。この独立は、後に諸社の長刀舞や獅子舞、散楽などをとり入れ、やがては祭礼の能をも自家のものとして、一時は一世を風靡したこともあった。

また、田をまきむ時の花田植は、都人には珍らしかつた舞で、これを真似る風俗が古く、これと農上人から祭礼にまで、新習を求め人々の間に流行したことがあった。―破れた大傘をした田主の装、美しく化粧した備女たち、田楽、扇舞などの行列、手当り次第の差籠を持ち出しては舞ひ、歌ひ、踊る。歌も多分は有り合せ、もしくは即興のものであらう。当時疫病はやってもはやらなくとも、歌手に響きこまれて想いを抱いて死んだ人たちの慰霊会などかましても、むしろ狂った臨時、定時の祭りに風流田楽も参加して、人々はものに惚かれたやうに狂り歩いた。近代奇証の事なども詳されたが、その最も顯著なものが、例の水長の大田遊であった。かうした田楽行列の行列は、今日もなほ方々に見られる。肥後の四郎神社の御田植祭の御田植師の行列、八幡伊佐須美神社の同じく御田植祭の行列などがそれである。興味深いのは、この双方とも、田男、田女は人形に似てかついでである。

六 住吉大社のおんだまつり

さて、住吉大社の御田植神事も、古来より知られてをり、由緒も深い。単に御田とも呼ばれてゐるこの神事は、今は新暦八月十四日の午後行加田植神事

本殿前では、御神事一同が先づ境内の石舞台に集り、お祝ひを受けた後、御田植神事一同が御田植の儀が行はれる。早苗は、今はもと新町の原の芝敷たちが備女となって受ける儀にしてゐるが、明治維新前までは、田植、舞の儀の遊女たちが奉仕してゐた。その謂は、神功皇后が在野の間から備女を召して御田植を願はせられたのであつたが、後この備女たちが乳守の遊女になつたので、その際により、年々備女は乳守から出たと言はれてゐる。住吉松葉大記の神書である土師龍朝は、これを論じ過ぎないと思はれるが、遊女が神事に奉仕することはやはり信仰の意味もあつたと思はれる。ただ、この遊女たちは花の備女で、田には入らない。折鶴した苗をいたゞき、御神田まで行列し、田ぐるを、まはりするのであるが、準備に田に入り苗を植ゑるのは替備女である。これが記述に見える住吉神事から奉仕するいはゆる「備女」である。

御本殿前の儀が済むと、やがて高以下に役員を受けた行列が神前よりほど近い御神田に渡る。その行列の主なものは、

大田主、兼人たち、風流武者、風流花傘、八乙女(八人)、新町の備見(八人)、神代女(二人)、備女(八人)、替備女(八人)、早乙女(八人)、住吉大勢

等である。御神田の中には、幅二尺七寸、長さ八間の檜製の先に、三間四方の舞台が立てられてゐる。行列は御神田の畔を、まはりして橋際の橋所に一旦入るが、後、風流花傘を先頭に、地女、替備女、兼見、大田主、その他の田植奉仕者達が一列に横断り花やかに渡つて舞台に入る。大田主が田に神水をそそぎ、備女が御神田に苗を渡す。これより先、神田は一週間の御田にまつて休養をされてゐるが、苗を受けた替備女たちは、田に下りて直ちに舞の正面の裏の方から苗を植ゑる。

※組見本(縮小50%)